

# 『ドイツ・イデオロギー』公刊史に関する覚書(一)

重 田 晃 一

## まえがき

マルクス、エンゲルスによつて『ドイツ・イデオロギー』が執筆せられたのは、一八四五年晩夏から翌四六年秋にかけてのことであつた。だが、それは種々の事情から篋底深く秘められたまま、生前遂に公刊の機会にめぐまれず、幾多の迂余曲折をたどりながら、ほぼ九十年に近い歳月をけみした一九三二年になつて、やつとその全貌が—それも草稿の今日存在するかぎり—公表されるに至つたのである。

この「不運なる」草稿の歴史については、すでにわれわれは、リャザーノフの手になる比較的詳細な二つのモノグラフィをもつている。すなわち、一九二三年十一月二十日、モスコ―社主義アカデミーでかれのおこなつた講演「カール・マルクスとフリードリッヒ・エンゲルスの遺稿に関する最新の報告」の

『ドイツ・イデオロギー』公刊史に関する覚書(重田)

印刷に付されたものがその一つであり、いま一つは、一九二六年、『マルクス—エンゲルス—アルヒーフ』第一巻に「マルクス・エンゲルス、フォイエルバッハ論」の表題のもとに、フォイエルバッハに関する遺稿をはじめて公表するにあつて執筆された「編輯者緒言」がこれである。<sup>(2)</sup>しかしこの二つの論稿は、それらが執筆された年代からある程度推定されるように、その後の研究の進展によつていくぶん訂正もしくは補正する必要がある。たとえば、そのいくつかの例として、(一)かれが『ドイツ・イデオロギー』草稿の篇別構成について下じた推定の訂正、(二)一九二六年以後ひきつづいてあらわれたこの草稿の部分の公表についての補正、(三)かれの指導下に編輯され、『マルクス—エンゲルス—アルヒーフ』第一巻に公表されたフォイエルバッハに関する遺稿の構成と、アドラツキーの指導下に編

## 『ドイツ・イデオロギー』公刊史に関する覚書（重田）

輯され、『マルクス・エンゲルス全集』第一部 第五卷に公表されたそれとの、比較対照と吟味の必要などをあげることができよう。またリャザーノフ自身は、エンゲルス死後にはじまつた諸家によるこの草稿の復元と公刊の努力の出発点を、メーリングの編輯にかかると『マルクス・エンゲルス・ラッサール遺稿集』第二卷（一九〇二年刊）においているけれども、わたし自身の調査によれば、問題の緒口はすでに一八九六年に開かれており、したがって筆をそこから起すのがより妥当におもわれる。しかもやや大胆ないかたをすれば、リャザーノフのこの二つの論稿は、一般に、この不朽の古典の公刊史上に占めるかれの先行者達の業績の欠陥をつくに急であつて、それらのもつ積極面をややもすれば過少評価する傾きが認められるのである。

ところで、このリャザーノフの二論稿の訂正・補正はそのつどおこなわれているけれども、その成果にたつて、『ドイツ・イデオロギー』草稿の復元と公刊の歴史の経過を通観したものは、いままおみられない。かくてこの歴史の経過を跡づけようとすれば、今日なお、われわれは、リャザーノフの二論稿にたよりながらこれをその後の成果によつて補正する、というはな

はだ面倒な手続をふまねばならない。だがこのような状況は、次の事情を、つまりアドラツキー版の出現による『ドイツ・イデオロギー』草稿復元と公刊の問題の一応の終結という事態を考えあわせるとき、問題をしめくくる意味でも、早急に克服される必要がある。

むろん、本稿はこのような要請に、ただちにこたえうるものではない。われわれの置かれている文献についての状況からいつても、それはとうてい不可能である。だが、それにもかかわらず、あえてその一端に近づいてみようとしたのは、こうである。周知の如く、かのアドラツキー版の出現以来、われわれはきわめて容易に『ドイツ・イデオロギー』全体を手にしうるようになった。だが、かえつてそのために、それが諸先学の数十年にわたる血のちむむような探索と整理の賜物であることを忘れ去ろうとする傾きはないか？そこでわたしはわたしなりに、先学苦闘の跡を追跡してみたただけのことである。またそれが後学の者の先学に対する礼儀でもあらう。

以下、本稿はもつぱらこのような関心にもとづき、利用しうるかぎりの文献はいま一度これをあらためなおしつつ、『ドイツ・イデオロギー』草稿の復元と公刊の歴史の経過をたどつた

ものづまね<sup>(20)</sup>

- 註(1) D. Riasanoff, Neueste Mitteilungen über den literarischen Nachlass von Karl Marx und Friedrich Engels, *Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung*, Jahrg. 11, Heft 3, 1925, S. 385~400. (以下この雑誌は Grünbergs Archiv と略称する。) その中でとくに本稿と関係が深いのは三八五—三九一ページまでである。邦訳は「カール・マルクス並にフリードリッヒ・エンゲルスの遺稿」の訳名で、土屋三郎訳『マルクス・エンゲルス遺稿考証』の中に収められている。なおこの論稿はただちに G・マイアーによる反論をよそふたつた (Vgl. G. Mayer, Die „Entdeckung“ des Manuskripts der „Deutschen Ideologie“ Grünbergs Archiv, Jahrg. 12, 1926, S. 284—287.)。
- (2) D. Riasanov, Einführung des Herausgebers zu: Marx und Engels über Feuerbach, (Erster Teil der „Deutschen Ideologie“), *Marx-Engels Archiv*, Bd. 1, S. 205—221. その中でとくに本稿と関係が深い『ドイツ・イデオロギー』公刊史に関する覚書(重田)

いのは二〇五—二一〇ページまでである(三木沢、七—一八ページ)。

ところで、この書物には発行年月の記載がなく、これを一九二六年とすることは若干の疑問があるようである。例えば、服部之総氏は一九二五年と推定しておられる(『ドイツ小ブルジョア・イデオロギー』七四—七六ページ)。だが氏の推定にも直ちに同じがたいので、ここではさしあたり Deutsches Bücherverzeichnis, Bd. 13 の記載にしたがって置く。

(3) 以下の本論の叙述の便宜までに、『ドイツ・イデオロギー』草稿をも含めたマルクス、エンゲルスの遺稿が、エンゲルス死後どのように処置されたかに関して、簡単にみてみよう。G・マイアーは次のようにしている。『エンゲルスはその遺言の中でヘーネルとヘルンシュタインの二人にマルクスとかれとの著作の遺稿をおくつたのであつた。先年(一九一三年八月—重田)ヘーネルは死去したが、そこでいまヤンヘルンシュタインがひとりこれを意のままにすることになつた。ところで、マルクス・エンゲルスの往復書簡や多

『ドイツ・イデオロギー』 公刊史に関する覚書（重田）

数の草稿は党の文庫がこれを保管したのに、ベルンシュタインはほかならぬこの文書（『ドイツ・イデオロギー』草稿—重田）を暫時自分の家においたままにしつゝた」（G. Mayer, *Erinnerungen*, Zürich/Wien 1949, S. 206.）。リヤザノフもほぼこれとよく似たことを述べているが、かれはそれと並んで、一九一一年にローラ・ラファルグのところへ「大部のマルクス・エンゲルスの草稿」があつたのを発見した旨、証言している。したがつて、遺稿の一部は何かの事情でベル、ベルンシュタインの手をすりぬけて、まづすぐにフランスに送られたものと考えられる（*Neueste Mitteilungen, Grimberg's Archiv*, Jahrg. 11, S. 385-387. 邦訳三〇六ページ）。また馬 葉礼「マルクス・エンゲルス文献秘話」〔『社会評論』第九卷第五号、一九四八年十二月号所収〕も、G・マイアーから直接に伝え聞いた話として、遺稿の処置にふれているが、それはさきのマイアーの『回想録』と軌を一にしている。なおこの点に関連してというと、本稿のねらいは、ベルンシュタイン—ごく一部の断片はラファルグ—の保管

七二

していた問題の遺稿がいかなるいきさつからどのような経路をとおつて順次公表されるに至つたかを、跡づけることにある。

## 一

『ドイツ・イデオロギー』草稿の復元と公刊の歴史は、「グリーン」稿の発見と覆刻からはじまる。<sup>(1)</sup> それはこの草稿の中で著者たち生前に公表された唯一の部分でありながら、いつしか人々の記憶からすつかりとおのいてしまつていたのである。

エンゲルスがロンドンの仮寓で死去したのは、一八九五年八月五日のことであつた。翌九六年、その一周忌もようやく間近に迫つた頃、『ノイエ・ツァイト』一四年号 第二巻は、二七、八号の二回にわたつて、P・v・ストルーヴェの「カール・マルクス、四〇年代の二つの未知の論稿——科学的社会主義の成立史によせて」という表題の論文を掲載した。<sup>(2)</sup> ストルーヴェ自身は、かれの投じた一石が幾重もの波紋をえがきつゝ、やがて、『ドイツ・イデオロギー』草稿の発見と公刊になつてあらわれようなどとは予想だになかつたが、はしなくも、ここに『ドイツ・イデオロギー』公刊史の幕が切つておとされたのである。

この論文で、かれは、『ヴェストフェーリシエス・ダンブポート』(Das Westphälische Dampfboot)に発表されながら、筆者自身によつてもまた忘れ去られたかに考えられるマルクスの「二つの未知の論稿」をひろいだし、紹介と論評とをおこなつたが、その一つが、はからずも、すでに述べた「グリーン」稿だつたのである。それは『ダンブポート』一八四七年八、九月号に二回にわたつて発表されたものであつた。いま一つの論稿は、今日、「クリーゲに反対する現状」として知られているものであつて、これまた、『ダンブポート』の一八四六年七月号に掲載されたのであつた。いまにしておもえば、ストルーヴェは巨大な鉅脈を掘りあてたといわなくてはならない。だが、かれはそのことにまつたく気がつかなかつたのである。

かれの関心はこの二つの論稿の成立事情の考証よりも、むしろ、もつぱら、この二つの論稿を素材にして、マルクスと真正社会主義者との関係を論定することにむけられた。すなわち、かれはこの二つの論稿の中にマルクスの「科学的社会主義の最初の宣言」を読みとることによつて、これを一挙に『哲学の貧困』にむすびつけ、さらに進んで、この二つの論稿を『共産党宣言』の水準に立つものと認定し、このような角度からマル

『ドイツ・イデオロギー』公刊史に關する覚書(重田)

クスと真正社会主義者との差異、対立を強調した。その結果、かれは両者の差異を浮彫りにすることには成功したけれども、逆にこの二つの論稿と『貧困』、『宣言』との間に存在する微妙なちがいを見失ひ、それはそれでふたたびかれから前者成立の事情考証への関心をぬきとつた。かくて、かれはせつかく貴重な資料を眼前にしながら、それらがマルクスのものであるとの推定をく、ただで満足してしまつたのである。

ストルーヴェによつて発掘され、あらためて紹介されたこの二つの論稿のうち、グリーンンに関する部分についていうと、『ノイエ・ツァイト』一四年号 第二卷 第三三号にベルシユタインの論文「マルクスと真正社会主義」<sup>(3)</sup>があらわれるにおよんで、問題はさらに一歩前進した。

これより先、ストルーヴェの論文は、第二回分に次のような風変りな註を挿入することによつて、問題前進への契機をはらんでゐた。註(一)はいう、「わたくしのこの論稿のできあがつた後で、わたくしは、グリーンンにたいする論稿がマルクスの遺稿の中にあるのを知つた。それが『ヴェストフェーリシエス・ダンブポート』に印刷されたものと同じであるかどうか、確かめることができたらしいのだが。P・v・ストルーヴェ

## 『ドイツ・イデオロギー』公刊史に関する覚書（重田）

## 七四

（『ヴェストフエーリシエス・ダンブポート』の論稿が手もとにないので、目下のところ、遺憾ながらわれわれもまたこれを確かめえない。だがストルーヴェによつて引用された箇所はのこらず問題の草稿の中にある。したがつて、ここで論じられているマルクスの記事はこの草稿の印刷されたものか、さもなければ、この草稿からの抜萃であろう。ねがわくば、早い機会にこの二つのものの関係を確定したい。編輯部）<sup>(4)</sup>。

そしてベルンシュタインの論文のねらいの一つもまたそこにあつたのである。

この論文をはじめるにあたり、ベルンシュタインは、『ノイエ・ツァイト』編輯部がストルーヴェの註に付註して確認した前述の事実を再確認したあとで、続けて次のように述べている。「それ（＝遺稿―重田）には後者（＝『ダンブポート』掲載の論稿―重田）と同じように、『真正社会主義の歴史叙述』という表題がつけられている。したがつて、いずれにせよ、それとこれとは本質的な点で一致している。草稿はエンゲルスの手で書かれ、いくつかがごく僅かのマルクスによる訂正がある。だが疑いもなくこの論稿はマルクスに由来する。スタイルと内容、それに周知のマルクスのグリーンにたいする関係、それ

らが一齊に示すところでは、マルクスが著作者である。おそらく原稿はエンゲルスによつて作成されたコピーであつて、マルクスが後で利用するためにとつておいたものとおもわれる」（S. 216）。

ストルーヴェによつて発掘され、マルクスのものと推定された、『ダンブポート』所収のグリーンに関する論稿は、いまやマルクス、エンゲルスの遺稿そのものと照合されることによつて、ストルーヴェの推定の正しかつたことが完全<sup>に</sup>立証されたのである。だが一歩踏みこんで、この新たに脚光をあびて登場した問題の遺稿の執筆事情の考証と位置づけという点になると、ベルンシュタインは黙して語らない。

「原稿は真正社会主義に関する他の論稿や、M・シュティルナー、B・パウアーに関する論稿と並んで、マルクスが死ぬまでは、かれの手に所有されていた。次いでエンゲルスがこれらの文書を保管していたが……」（S. 216～217）——すでに『ドイツ・イデオロギー』の全貌を熟知している今日の眼で眺めれば、なかなか興味をそそられる陳述である。だがこの陳述は、突如としてそこで方向を転じて、エンゲルスがこれらの遺稿の中の真正社会主義に関する部分の公表を晩年に一度は企図

していた、という追憶談にかわつてゆく。

周知のように、マルクスは『経済学批判』の「序言」で、また(5)  
 エンゲルスは『フォイエルバッハ論』の「序文」で、『ドイツ・イ  
 デオロギー』草稿に言及する機会をもつた。ベルンシュタイン  
 は、はたして、すでに引用した文章でかれが話題にのぼした遺  
 稿とこれとを結びつけえなかつたのだらうか？ともあれ、直接  
 の資料に即してみたかぎりでは、かれの論文は、ストルーヴェ  
 によつてマルクスが執筆者だと推定されたものを、遺稿そのも  
 のによつて確証しただけにおつたのである。

そうこうするうちに、問題の遺稿が『ドイツ・イデオロギー』  
 草稿の一部分を構成することが別の資料によつて立証された。  
 『ノイエ・ツァイト』一四年号 第二巻 第三九号に掲載され  
 たメーリングの「マルクスと真正社会主義再論」が、その資料  
 を提供したのである。(7)

表題が示すように、メーリングのこの論文のねらいは、マル  
 クスと真正社会主義との関係を論じたストルーヴェ、ベルンシ  
 ュタインの論稿のあとを承けて、かれらの提出した資料とその  
 評価とに「いくつかの補足と追加をする」(S. 395)ことにあ  
 った。この「補足と追加」の一つとして、かれはマルクスの筆

『ドイツ・イデオロギー』公刊史に関する覚書(重田)

になる一八四七年四月六日付『ブリュッセルドイツ語新聞』

の記事、「カール・グリュンに反対する声明」を忘却の淵から  
 救い出したが、意外にも、これが、ベルンシュタインがその存  
 在を指摘した問題の遺稿とくにグリュンに関する草稿が、『ド  
 イツ・イデオロギー』の草稿であることを立証するきめてとな  
 った。「声明」の一節はいう、「わたくしは一年来すでにでき  
 あがつた詳細な評論を草稿のままねかせているが、それはベル  
 リンの友人の要請で、今度はじめて『ダンフポート』へ印刷の  
 ために送られる。評論はF・エンゲルスとわたくしとが協同で  
 執筆した『ドイツ・イデオロギー』(フォイエルバッハ、B・  
 パウアー、シュテイルナーに代表される最近のドイツ哲学と様  
 々な予言者におけるドイツ社会主義との批判)の追加をなすも  
 のである。」(S. 395)。『ドイツ・イデオロギー』草稿につ  
 いてかつて著者たちが言明した二典拠(『経済学批判』「序言」  
 と『フォイエルバッハ論』)に較べると、ここでは草稿の範囲  
 と編成とがより明確に示されている。それがいまあらためて人  
 々の追憶の中によみがえつたのである。

もしメーリングがその気になれば、かれはこの「声明」に依  
 拠しながら、さきにベルンシュタインが口にした遺稿が、この

## 『ドイツ・イデオロギー』公刊史に関する覚書（重田）

七六

「声明」にいうところの評論その他の草稿ではないかとの疑いをさしはさみえたはずである。少くとも、グリューンに関する論稿については、その点を確定しておくべきだっただろう。ところが、「わたくしがこの宣言の本質的内容を文字どおりに再現したのは、それが『ノイエ・ツァイト』に近々公表されるグリューンに関する論稿の理解に重要だとおもわれたからである」(S. 367)——問題をかく提起しながら、かれは以上の確認すらしなかつたのである。

さて、ベルンシュタインはさきに言及した論文の中で次のように言明していた。「おもうに、ストルーヴェ氏がグリューンに関する論稿をあかるみに出したからには、その覆刻はもはや猶予されてはならない」(S. 217)。『ノイエ・ツァイト』の編輯部もまた同じ論文の中で註して、「われわれはまもなくこれを公表する予定である」(S. 216)と約束していた。だがその履行は案外にまでどつた。このときより三年を経過した一八九九年になつて、やつと年来の約束が果されたのである。『ノイエ・ツァイト』一八年号 第一巻 第一、二、五、六号に収録された「カール・マルクス、社会主義の歴史叙述家としてのカール・グリューン論——マルクス・エンゲルス遺稿より」が、

すなわちこれである。編輯者はベルンシュタインであつた。<sup>(9)</sup>

本文の前に付された「緒言」はいう、「以下の印刷はエンゲルスの遺稿に見出される草稿にもとづいておこなわれる。それは所々の箇所で『ダンプポート』に印刷されたものから離れているが、ちがいは全体として非本質的な性質のものである。多分、問題は明らかに『ダンプポート』における誤植、脱漏にある。……草稿はエンゲルスの筆になり、マルクスにより個々の短い補足がなされている。なるほどマルクスが主要な執筆者であつたが、エンゲルスもまたここでは本質的な援助をあたえている」(S. 5)。

いまやエンゲルスの「本質的援助」が認められている。だがメーリングの論文のあとをうけたこの時点においても、「緒言」がこの草稿を『ドイツ・イデオロギー』の一部として取扱うという視点を欠いているのは、不思議といわなくてはならない。そしてわれわれがこの点の確認に出会うのは、メーリングの編輯による『マルクス・エンゲルス・ラッサール遺稿集』第二巻においてである。

註(1) 現存の『ドイツ・イデオロギー』草稿にもとづいてアドラツキーが復元したところによると、それは次の



ものからなる。周知の如く、それは二部にわかれる。

第一部は①マルクスの序文、②全体の総括的部分をなす「フオイエルバッハ」、③④の二つの草稿への緒論をなす「ライプチヒ宗教会議」と題する小節、④「二、聖ブルーノ」、⑤「三、聖マックス」、⑥「ライプチヒ宗教会議の終結」と題される小節からなるはずであった。第二部も六つの草稿から成るはずであったが、今日保存されているのは①緒論的部分をなす「真正社会主義」②「一、『ライプ年誌』あるいは真正社会主義の哲学」、③「カール・グリューン『フランクス、ヘルギーにおける社会運動(ヤルムシタット、一八四五年)』あるいは真正社会主義の歴史叙述」、④「五、『ホルシユタイン出身のゲオルク・クルマン博士』あるいは真正社会主義の予言」である。以下本稿では叙述の便宜上、第一部の草稿中、①を「フオイエルバッハ」稿、②と③をあわせて「ハウアー」稿、④と⑥をあわせて「シユテイルナー」稿とよび、第二部の草稿についても、①と②をあわせて「真正社会主義の哲学」稿、③を「グリューン」稿、④を「ツァイツ・イデオロギー」公刊史に関する覚書(重田)

「ルマン」稿と称する。

- (2) P.v. Struve, Zwei bisher unbekannte Aufsätze von Karl Marx aus den vierziger Jahren, Ein Beitrag zur Entstehungsgeschichte des wissenschaftlichen Sozialismus, *Newe Zeit*, Jahrg. 14, Bd. 2, 1895~1896, Nr. 27, S. 4~11, Nr. 28, S. 48~55.
- (3) Ed. Bernstein, Marx und der „wahre“ Sozialismus, *Newe Zeit*, Jahrg. 14, Bd. 2, 1895~1896, Nr. 33, S. 216~220.
- (4) P.v. Struve, a. a. O., S. 48
- (5) Vgl. K. Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, Dietz Verlag, Berlin 1951, Vorwort, S. 14~

15. 邦訳『国民文庫版一ペーシ』。

- (6) Vgl. F. Engels, Ludwig Feuerbach und der Ausgang der klassischen deutschen Philosophie, *Ausgewählte Schriften*, Bd. 2, S. 333~334. 邦訳『大月版『マルクス・エンゲルス選集』一五巻 四二一五ペーシ』。

(7) F. Mehring, *Nochmals Marx und der „wahre“*

『ドイツ・イデオロギー』公刊史に関する覚書(重田)

Sozialismus, *Neue Zeit*, Jahrg. 14, Bd. 2, 1895~

1896, Nr. 39, S. 395~401,

(8) この声明は『マルクス・エンゲルス著作集』第四巻

(*Marx-Engel Werke* Bd. 4, Berlin, 1959) の三

七一三九ページに収録されている。この『著作集』でも、また『マルクス年譜』(MERL研究所編、岡崎・渡辺共訳)五一ページでも新聞の日付は四月八日号となつている。リヤザーノンフによれば、四月六日というのは声明に付された日付である。

(9) Ed. Bernstein (herausg.), *Karl Marx, über Karl*

*Grün als Geschichtsschreiber des Sozialismus, Aus*

*dem Marx-Engelschen Nachlass, Neue Zeit, Jahrg.*

18, Bd. 1, 1899~1900, Nr. 1, S. 4~11, Nr. 2, S.

37~46, Nr. 5, S. 132~141, Nr. 6, S. 164~172.

そのうち Nr. 1 の S. 4~5 はマルクシニクタイトインの「序言」である。また、これをテキストにした邦訳は改造社版『マルクス・エンゲルス全集』第一五巻に収録されてゐる。

七八

二

一九〇二年、メーリングの編輯にかかる『マルクス・エンゲルス・ラッサール遺稿集』全四巻が刊行されたが、その第二巻をとおして問題は新たな展開を示すに至つた。<sup>(1)</sup> というのも、われわれはこの『遺稿集』第二巻で、はじめ、(一)『ドイツ・イデオロギー』の草稿の存在が確認されてその構成の一端が語られるのをきき、またそれと関連して、(二)前章で論じたグリーンンに関する遺稿がこの草稿の一部を構成することが明白にしているのを読み、(三)全部あわせても僅か四〇〇語にみたぬけれども、「バウアー」稿の断片がはじめて引用されているのを発見するからである。以下この『遺稿集』第一巻を起点に、「バウアー」稿が完全に公表されるまでの経過を跡づけてみよう。

まずわれわれの眼をひくのは、「第七章 ドイツ社会主義の諸雑誌から」のはじめにおかれた「編輯者緒言」(S. 329~392)である。そこでは小見出しの(2)として「ドイツ・イデオロギー」という言葉がみえる。

その一節で、かれはこの草稿が、「一般に完成されているか

ぎりで、マルクス・エンゲルスの遺稿の中に見出される」(S. 336)ことを告げ、さらに進んで、すでに前節で引用したマルクスの「グリーンンに反対する声明」の内容を裏書きするかのよう、それが「B・パウアー、シュティルナー、フォイエールバッハとの批判的対決を含む」第一部と、「ドイツ社会主義の予言者たちを論じている」第二部とから構成されていることを伝えている。

だがそれ以上のことになると、「緒言」はほとんどなにも語らない。まず第一部についてみると、パウアーに関する論稿は、『神聖家族』がパウアーについて「すでに豊富な資料を提供している」(S. 346)という批評で黙殺され、シュティルナーに関する論稿については、「シュティルナー批判はすでに書きあげられていたが、かれはこれをとくに必要だとは考えなかつた」(S. 336)というにとどめて、以後は一八四六年四月三十日付のマルクス宛ヴァイデマイアーの手紙によつて、かれのこの評価を立証することに熱中している。かれはまた、フォイエールバッハに関する論稿に言及して、「B・パウアーやシュティルナーの批判と較べて、けたはずれに興味をそそられる」(S. 336)と評価しながらも、その内容には一言半句も費さないで、

『ドイツ・イデオロギー』公刊史に関する覚書(重田)

突如として、筆をマルクス、エンゲルスのフォイエルバッハからの訣別事情の考察に転じている。

では第二部について、かれはどれほどの光明を投じたのだろうか? 「そのうちの一章、つまりベルギーとフランスの社会運動に関するグリーンンの書物の批判を、マルクスは『ダンプロート』に発表した」(S. 347)との叙述は、前節で論じたグリーンンに関する草稿が『ドイツ・イデオロギー』草稿の一部をなすことをはじめて確言した点で興味深い、しかし第二部のそれ以外の草稿に関しては、かれは、その中で誰れがいかに批判されているかをなにもひとつ報じていない。

メーリング「緒言」の『ドイツ・イデオロギー』草稿に関する報告は、この草稿を自分の眼で確かめたものの報告にしてはその収獲があまりにもとぼしい、といわなくてはならない。それははたして、草稿の綿密な検討をへたうえでなされたものであつたのだろうか? 事実、それにしても少々解しかねる現象がこの『遺稿集』第二巻で起つていたのである。すでに述べたように、この「緒言」では、「パウアー」稿は簡単に黙殺されていた。ところが、まぎれもない、この草稿の断片が同じ『遺稿集』の別の箇所での姿をあらわしていたのである。

『ドイツ・イデオロギー』公刊史に関する覚書(重田)

八〇

「第四章 神聖家族もしくは批判的批判の批判」「編輯者緒言」(S. 95~102)の(6)は、「ライプチヒ宗教会議」という表題がつけられている。それはこの「緒言」全体のしめくくりとして、『神聖家族』刊行後のいくつかのエピソードを伝えたものであるが、ここではシュティルナーのはなばなしの登場ぶりや、ヘスによる『最後の哲学者たち』の刊行などが解説され、最後に、『ヴィガント季刊誌』第三巻でかわされたB・パウアーとシュティルナーの論戦の紹介と批評でもつて叙述は閉ぢられている。さて、メーリングはこの論戦の紹介と批評の一環として、「フリードリッヒ・エンゲルスのユーモラスな論稿」(S. 99)と称するものから三箇所を引用するのであるが、この引用を今日われわれの手にする『ドイツ・イデオロギー』のテキストと対比すればわかるように、かれのいう「エンゲルスのユーモラスな論稿」とは、意外にも、実は「パウアー」稿のことであつて、かれはその三箇所からあわせて約三七〇語(四〇語、一〇〇語、二三〇語)をとりだしたのである。<sup>(2)</sup>このように、かれは「パウアー」稿をみずから手にし、それからいくつかの引用すらしおきながら、しかもこれをエンゲルスの論稿だと誤認したために、肝心のところで、それと『ドイツ・

イデオロギー』との関係を断ち切つてしまつたのである。

さて、一度切り離されてしまつたものをいま一度結びつけることは、おもいのほかに困難であつた。というのも、いまやパウアーに関する遺稿は、メーリングの手によつて他の『ドイツ・イデオロギー』草稿と無関係であるかの如くに評価されたばかりでなく、草稿そのものとしても、それは他の草稿から切り離されて全く異つた場所に保管されてしまつた(もしくははしまつていた)からである。われわれはそれを次の G・マイアーの報告によつて知るであらう。

メーリングによる『遺稿集』の刊行から一八年の後、一九二〇年のことだが、G・マイアーの『フリードリッヒ・エンゲルス伝』第一巻(「初期のフリードリッヒ・エンゲルス、一八二〇年—一八五一年」)<sup>(4)</sup>があらわれた。その「第九章 ドイツ・イデオロギーの清算」は「フォイエルバッハ」稿の梗概をはじめで紹介することによつて、一部の人々を瞠目せしめたが、この書物の最後に付された「典拠と報告」の一節は次のような証言をしている。「エンゲルスの筆になり、マルクスによる僅かの書き入れを含むライプチヒ宗教会議の草稿を、わたくしは社会民主党の文庫で利用した。それはこの文庫のマルクスの遺稿の

中に保管されている」(S. 404)。

ところで、G・マイアーは同じ「典拠と報告」のすぐまえのところ、『ドイツ・イデオロギー』草稿は——それが今日なお存在しているかぎり——ベルンシュタインがこれを保管している、と伝えている。このようにして、パウアーに関する遺稿がふたたびこの世の光の中にもちだされたときには、それは他の草稿から切り離されて、まったくおもいもかけぬ場所に放置されていたのである。

さて、メーリングによつて場所的にもまた著作としても相互に切り離されてしまったこれら二群の草稿は、G・マイアーの手によつて一つの著作(『ドイツ・イデオロギー』)に属することが確定されるのだが、この作業たるや必ずしも容易なものとはいへなかつた。

『エンゲルス伝』第九章のパウアー批判について触れた箇所その他を検討すれば認められるように、そこでの叙述には、それが社会民主党的文庫で発見したパウアーに関する遺稿が素材として利用されている。<sup>(5)</sup>否、それだけではない。この草稿を指して「エンゲルスによつて案出された Rahmendichtung\*」(S. 244)と呼んだ特徴づけの言葉およびそれに前後する章句に示

『ドイツ・イデオロギー』公刊史に関する覚書(重田)

されるように、かれが当初からこの草稿を『ドイツ・イデオロギー』草稿の構成部分として処理していたことは、きわめて明瞭である。G・マイアーの『エンゲルス伝』がこの点で果した役割は十分に評価されなくてはならない。<sup>(6)</sup>

※ Rahmendichtung とは、例えば千一夜物語のように、数個の物語をうちに含む物語、創作のことをいう。

このように、G・マイアーは、はやくもその『エンゲルス伝』で、かつてメーリングが他の『ドイツ・イデオロギー』草稿から切り離して別箇の論稿として処理してしまつた「パウアー」稿をふたたび前者の中に組み入れることに成功したけれども、そのばあい、なお重要な問題がいぜんとして未解決のままに放置されていた。というのも、なるほど『エンゲルス伝』は「パウアー」稿を『ドイツ・イデオロギー』の一部分として取扱つてはいるけれども、しかしそこではこのかれが社会民主党的文庫で発見した遺稿とかつてメーリングが「エンゲルスのユーモラスな論稿」として紹介した遺稿との関係は全く問われていず、したがつてまたこのメーリングの評価そのものも、検討されていないからである。しかしこの問題たるや、次節でやや立ち入つて述べるように、ベルンシュタインが一九〇三年にはやくも

『ドイツ・イデオロギー』公刊史に関する覚書（重田）

八二

それにつきあたりながらも無自覚のままに放置してただけに、きわめて重要な問題であつた。そしてその意味では、『エンゲルス伝』での「パウアー」稿の取扱いはなお不十分さを免れなかつた。この問題をも含めて「パウアー」稿をめぐる問題を完全に解き明かすためには、かれにはなお一年の歳月が必要であつた。

一九二一年十月、『アルヒーフ・フュア・ゾチアールヴィツセンシャフト・ウント・ゾチアールポリティーク』第四七巻第三号は、「マルクス・エンゲルス、ライプチヒ宗教会議——附論、G・マイアーの序言」という表題の論稿を掲載した。<sup>(8)</sup>それは、G・マイアーが社会民主党文庫のマルクスの遺稿の中に発見したブルーノ・パウアーに関する問題の遺稿をはじめ印刷したものであるが、その序言で、編輯者マイアーは、かれが『エンゲルス伝』でなお未解決のまま放置していた問題をも含めて、問題の草稿の位置にはじめて完全な解決を下したのである。

「序言」の冒頭で、マイアーは、第一次大戦後の世代の体験しつつある世界の危機、それと結びついた歴史観の危機を説き、これらの諸問題の解決のためには、いまや唯物史観の無視しえざ

るゆえんを力説している。そのさい、かれは遺稿『ドイツ・イデオロギー』が唯物史観形成史の中で占める決定的な地位を重視し、かれの作業もまた、この遺稿をめぐるいくつかの問題に新しい光を投げかけようとするものであることを明らかにしている。そしてその中で、かれは問題の遺稿（＝社会民主党の文庫で発見されたパウアーに関する遺稿）の位置を確定して、次のようにいつている。「二〇年ほど前に、今日なおこの宝物（『ドイツ・イデオロギー』草稿——重田）の見張をしているエドワルト・ベルンシュタインが『ドクメンテ』——その全五巻は社会主義の歴史の分野の研究にとつて宝庫である——にこの著作の若干の広汎な章を公表した。ベルンシュタインは、『イデオロギー』の諸章の中からシュティルナーと対決している箇所をとりだしたのである。ところで、それにはマルクス、エンゲルスがすでに『神聖家族』で決定的に片付けたと信じたブルーノ・パウアーをいま一度片付けている章が付随している。その他の草稿はエンゲルスの遺稿の中に見つけられたのだが、ある種の偶然からこの手稿は社会民主党の文庫に保存されているマルクスの遺稿の中におかれたままになつてた。メーリングがこれをここで発見したのだが、それはかれがその古典的な遺稿集

の準備をしていたときのことだつた。とはいふものの、かれは

当時この断片がいかなる枠にはまるものなるやを知らず、その中に『フリードリヒ・エンゲルスのユーモラスな論稿』をみるにとどまつた。事実、この草稿はほとんど全部エンゲルスの筆蹟を示している。……」(S. 775~776)。

いまや、G・マイヤーによる上述の位置づけをもつて、「パウアー」稿をめぐる問題は完全に解き明かされたのである。メーリングによる『遺稿集』公刊の年から起算すると、そのあいだに、ほぼ二〇年の歳月が流れ去つていた。

註(一) F. Mehring (herausg.), *Aus dem literarischen*

*Nachlass von Karl Marx, Friedrich Engels und*

*Ferdinand Lassalle*, 4 Bde., Stuttgart 1902. 50のう

ち、ラッサールのマルクス・エンゲルス宛の手紙を取

録した第四巻は後に(再版もしくは第三版? 不明)

除かれて、『マルクス・エンゲルス遺稿集』全三巻となつた。しかしその他の内容、ページ数には変化はないようである。本稿では第四版を使用する。

(2) F. Mehring (herausg.), *Aus dem literarischen*

*Nachlass von Karl Marx und Friedrich Engels*,

『ドイツ・イデオロギー』公刊史に関する覚書(重訂)

Bd. 2, 4. Aufl. Berlin und Stuttgart 1923, S. 99

~100.

(3) どのような事情で「パウアー」稿が他の草稿から切り離されて、社会民主党文庫のマルクスの遺稿の中にまぎれこんだかについて、リャザーノフとG・マイヤーの説明はくいちがつてゐる。リャザーノフの説明によると、『遺稿集』の編纂にさいしてメーリングがベルンシュタインから「パウアー」稿を借り出し、その後で誤つてこれを他のマルクスの遺稿と一諸に社会民主党の文庫に入れたことになつてゐる。G・マイヤーによると、何かの事情ではじめから文庫に保管されてゐて、これをメーリングが利用したことになつてゐる。リャザーノフの説明がヨリ説得的とおもわれるが、G・マイヤーの説明をとれば、叙述はカッコ内のものに改められるべきである。G・マイヤーの説明については、本節最後の叙述を、またリャザーノフのそれについては、「最新の報告」(*Grünbergs Archiv*, Jahrg. 11, S. 387~388 邦訳三~四ページ)『キヤビツ「フォイエールバツ」論』「編輯者緒言」(*Marx-Engels*

『ドイツ・イデオロギー』公刊史に関する覚書(重田)

八四

*Archiv* Bd. 1, S. 208. 三木訳一四ページ)を参照の  
 事。

(4) G. Mayer, *Friedrich Engels, Eine Biographie*,  
 Bd. 1, Berlin 1920. (Friedrich Engels in seiner  
 Frühzeit 1820~1851). その中で第九章には二三四~  
 二六一ページがきかかれている。

(5) Vgl. Ebenda, S. 243~245. ちなみにいえば、二四  
 三、二四四ページでそれぞれ一〇、二四五ページで二  
 つ「バウアー」稿からの引用がみえる。

(6) この点については、リヤザノフの批評とそれにな  
 らずる G・マイアーの応酬とがあるので、いま少し  
 詳細にみておこう。念のために『エンゲルス伝』から  
 「バウアー」稿の最初の叙述部分を略述した箇所の後た  
 くる叙述をヨリくわしく引用しておく。次のようにな  
 る。「この明びかにエンゲルスによつて案出された  
*Rahmendichtung* が、ちよととをよびとげられて、また、  
 多分、読みごたえのある書物ができあがつていたたろ  
 う。だが著者たちは世間のためというより、むしろ自  
 己了解と自己の用に立てるために筆をとつたのである

から形式を無視したし、そこで個々の点では機智にと  
 み明敏さにあふれているにもかかわらず、現存の草稿  
 では、達見にみちつとも、気のおもむくままに些事に  
 流れた論争は、元来企図されていた枠をはみだして  
 いる」(S. 244)。G・マイアーのこの叙述も必ずしも明  
 確といえぬけれども、しかしリヤザノフが『エンゲ  
 ルス伝』における「バウアー」稿の取扱いを評して、  
 「かれは当時なお『ライプチヒ宗教会議』(「バウア  
 ー」稿のこと—重田)も……同じ『ドイツ・イデオロ  
 ギー』の一構成部分をなすものであるということにつ  
 いてさへも、はつきりしていなかつたようにみえる」  
 (Marx-Engels Archiv, Bd. 1, S. 208. 三木訳一四  
 ページ)というとき、かれの評価は誤つてゐる。なお  
 この点については、G. Mayer, Die „Entdeckung“  
 des Manuskripts der „Deutschen Ideologie“, *Gr-  
 ünbers Archiv*, Jahrg. 12, 1926, S. 286 Anmerkung  
 を参照のこと。

(7) 本稿第三節八七—八八ページ参照。

(8) F. Engels u. K. Marx, *Das Leipziger Konzil*,



mit Einführung von Gustav Mayer, *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 47, 1920  
 ~1921 S. 773~808. ただし、その中で七三七~七八二ページまではマイアーの序文である。なお、これをテキストにした邦訳は改造社版『マルクス・エンゲルス全集』第一五巻に収録されている。

## 三

前節末尾のG・マイアーからの引用の示すように、「シュティルナー」稿がはじめて公表されたのは、ベルンシュタインの編輯した『ドクメンテ・デス・ソチアリスムス』<sup>(1)</sup>においてであった。ここで、時代はふたたびメーリングによる『遺稿集』の刊行をへること一年、一九〇三年にまでさかのぼる。すなわち、この年、『ドクメンテ』第三巻 第一冊は、エンゲルスがベルンシュタインとベーベルとにゆだねたかれとマルクスとの遺稿の中から、マックス・シュティルナーに関する部分の公表に着手した。<sup>(2)</sup>『ノイエ・ツァイト』における「グリーン」稿の公表につづいて、いまや、『ドイツ・イデオロギー』第一部の大半を占める「シュティルナー」稿もまた公衆の眼に触れるに至つたのである。

『ドイツ・イデオロギー』公刊史に関する覚書(重田)

である。ところで、この遺稿は同じ巻の第二、三、四、七、八冊にひきつづいて収録され、さらに第四巻の第五、六、七、八、九冊へとひきつがれてゆくのだが、<sup>(3)</sup>やがて『ドクメンテ』が第五巻で廃刊になるや、公表もまた中断のやむなきに至つた。以後、ベルンシュタインやその他一、二の人々による未発表部分の断片的な公表の試みはあつたが、結局、一九三二年までは全面的な公表はおこなわれずにおつた。

では、このシュティルナーに関する遺稿の中から、どれだけの範囲と量のものが『ドクメンテ』で公表されたのだろうか？ 周知の如く、「シュティルナー」稿は「旧約聖書—人間」と「新約聖書—自我」との二つの部分にわかれる。やや粗雑にいうと、『ドクメンテ』第三巻は前者を収録し、第四巻には後者のうちの「神学者ヨハネの啓示、もしくは「新しき智慧の論理学」」までが収録されている。量的にいうと、公表された部分は遺稿全体のほぼ半ばにあたる。

だが公表された部分についても、今日の水準からみると、なお次の点に注意されなくてはならない。

第一に、「旧約聖書—人間」の部分には省略された章、節があり、あるいはまた抜萃の部分がある、ということである。

『ドイツ・イデオロギー』公刊史に関する覚書（重田）

「1. 創世紀、すなわちある人間の生涯」、「2. 旧約聖書の撰理」、「3. 古代人」に関していうと、この点では、おおむね問題はない。ところが、「5. 自己の構成に満足せる『シュテイルナー』」は完全に省略されている。また、「6. 自由主義者たち」では、「C 人道的自由主義」がこれまた完全に省略されている。これが「4. 近代人」になると事態はややこみいつている。ここでは完全に収録されているのは、「D 教権制」だけである。「A 精神」は完全に省略されている。「B 憑れた人々」についていうと、ここではすべて抜萃したものが公表されているにすぎない。また「C 不純にして不純な精霊史」では、「bカトリックとプロテスタンティズム」が完全に収録されているのたいして、「aニグロと蒙古人」の中からは「第六の『歴史的反省』」、「第七の『歴史的反省』」、「第八の『歴史的反省』」のみが公表されて、他はすべて省略されている。

第二に、「ネズミどもの噛つてする批判」（『経済学批判』『序言』）その他にもとづく毀損を理由にして、かなりの箇所て語もしくは語句が欠落していることである。その箇所はおおむね……もしくは「……」によって指示されているが、そのさ

八六

い注意すべきは、「旧約聖書—人間」ではその数もきわめて少く、また欠落の程度も一語もしくは、数語にかぎられているのたいして、「新約聖書—自我」では欠落がきわめて頻繁であり、しかもかなり長い語句もしくは文章がしばしば欠落しているのが認められる。<sup>(4)</sup>

ともあれ、以上のような欠陥を含んでいるけれども、いまや「シュテイルナー」稿の公表がはじまり、また事実その半ばに近いものが印刷に付されたのである。だがすでにリャザーノフも指摘しているように、ベルンシュタインがこの公表に着手したとき、かれは「『全体』<sup>(5)</sup>についてはかなり不明瞭な観念しかもつていなかった」ようにおもわれる。というのも、かれはこの遺稿の公表にあつて約二ページ半におよぶ「緒言」を書いているけれども、そこではこの遺稿を『ドイツ・イデオロギー』草稿体系の中に位置づけようとする志向はほとんど認められず、またかれ自身の敘述の中にそれへの鍵が散在しているにもかかわらず、これらそのような方向に凝集しようとした氣配がまったく存在しないからである。

「緒言」の一節は次のようにいつている。「この論稿はマルクス・エンゲルスがその中でヘーゲル左派最左翼のかれらの以

前の戦友たちを清算したぼうだいな論稿の一部分であつて、そのようなものとして、たんに巨大な歴史的興味を有するばかりでなく、また内容的にいつても不朽の価値を有する多くの箇所を提供している。……その全内容を公刊することは、ある種の重大な事情がこれをさまざまにしている。そしてそれに関連するのだが、「ネズミどもを噛つてする批判」(『経済学批判』「序言」)というマルクスの言葉は、文字どおりそのとおりであつた」(Bd. III S. 18~19)。

いまこの文章を『経済学批判』「序言」や『フォイエエルバッハ論』「序文」の周知の敘述に照らして検討すれば了解されるように、このばあいベルンシュタインの念頭に、かつてマルクス、エンゲルスが『ドイツ・イデオロギー』草稿に言及した言葉が浮んで来たこと、したがつて、かれが問題の遺稿をこの草稿の一部分として取扱おうとしていたことには、疑点はない。だが一歩進んで、それではこの草稿全体はいかなる部分よりなりたつていたかという点になると、かれの見透しははなはだ曖昧であつた。例えば、ベルンシュタインの「序言」はその一節でいう、「原稿にはいただきにローマ数字でⅢという字がおかれているが、それだけからでもわかるように、それ(Ⅲ)「シユ

『ドイツ・イデオロギー』公刊史に関する覚書(重田)

ティルナー」稿(重田)はある総合的な著作の一部に予定されていたのである。その最初の文章のところで、それは論稿「ラ イプヒヒ宗教会議」(Ⅲ「パウアー」稿(重田)、つまりすでに挙げた巻(Ⅱ「遺稿集」第二巻(重田)の九九ページ以下でメーリングが論評し、ブルーノ・パウアーとマックス・シュティルナーとが『ヴィガント季刊誌』一八四五年第三冊に公表した論文を嘲弄しているところの論稿に接続している」(Bd. III S. 19)。

ところがすでに繰返し述べたように、メーリングは「パウアー」稿を『ドイツ・イデオロギー』草稿から切り離して、これを「エンゲルスのユーモラスな論稿」として処理してしまつたのであつた。したがつて、もしベルンシュタインがメーリングのこの評価をそのまま承認するのであれば、「シユティルナー」稿は「パウアー」稿などと結びついて「ある総合的な著作」をなすというのだから、前者もまた「エンゲルスのユーモラスな論稿」だという結論になりそうである。あるいはまた、問題の遺稿は『ドイツ・イデオロギー』草稿の構成部分だとあくまでも主張するのなら、「パウアー」稿にたいするメーリングの評価があらためて検討されなくてはなるまい。ベルンシュ

『ドイツ・イデオロギー』 公刊史に関する覚書（重田）

八八

タインは、後に一九二〇年になつて G・マイアーがおかれたのとよく似た状況におかれていたのである。<sup>(7)</sup>だが、かれはそういった検討を一切放棄して、問題を曖昧のままにのこしてしまつたのである。

『ドイツ・イデオロギー』草稿の篇別構成の問題にたいするベルンシュタインの曖昧な態度は、さらに次の例にもうかがわれる。すなわち、かれはヘス執筆参加の問題に触れた箇所で、「また同じヘスによつて『予言者クルマン』を取扱つた草稿が遺稿にそえられている」(Bd. III, S. 17) という敘述によつて、後に一九二六年にリャザーノフによつてはじめてその位置の確定された草稿<sup>(8)</sup>の存在を報告しているけれども、さらにそこから一步踏み出して、この草稿が「ある綜合的著作」とどのような関係にあるかを論じようとはしないのである。そしてその結果、この貴重な草稿は、結局、一九二六年までふたたび人々の視界から没してしまふのである。

このようにして、『ドイツ・イデオロギー』草稿全体の保管者という有利な地位にありながら、草稿全体の構成に一定の見透しをもたずまま、ベルンシュタインは「シュティルナー」稿の公表をはじめたのである。

さて、それでは、『ドクメンテ』の廢刊にともなう「シュティルナー」稿の公表の中絶以後、事態はどのような歴史的経過をたどつただろうか？ 遺憾ながらそれについては原資料を手もとに有していないので、詳細に経過を跡づけることができない。そこで以下では、他の資料から知りえたかぎりのことを摘記するにとどめておこう。

まずリャザーノフの伝えるところでは、『ドクメンテ』での公表が中絶されてより約一〇年をへた一九一三年、ふたたびベルンシュタインの手で、「新約聖書—自我—」<sup>(9)</sup> 固有者—の中の「Cわたしの自己享樂」の部分が公表された、という。掲載紙は、クルト・アイスナーによつて編輯され、ミュンヘンで発行されていた「Arbeiter-Funkelton」というタイプライター複写版の雑報通信であつて、その三月九日付第八号に掲載された。ところで、それとまったく同一のものか否か、にわかに断定しがたいが、S・ランツフト、J・P・マイアーによると、この「Cわたしの自己享樂」は、これまたベルンシュタインによつて、同年三月十四日付の「Vorwärts」 娯楽版に公表された、ともいわれる。<sup>(10)</sup>

以上のベルンシュタインの企図は、やがて J・P・マイアー

に受け継がれる。その一つは、「旧約聖書—人間」「6.自由主義者たち」の中の「C人道的自由主義」の公表である。すでに述べたように、この箇所は『ドクメンテ』で収録の断念された部分であったが、<sup>(11)</sup>一九三〇年、J・P・マイアーは、これを「Kampf」二三年号にはじめて公表した。<sup>(12)</sup>次いで翌三十年、かれとカンブマイアーとが編輯人であった「Sozialdemokratische Lehr- und Lesebücher」第二号に、<sup>(13)</sup>これまたJ・P・マイアーの手で、「新約聖書—自我」「5.市民社会としての社会」の中の「論文二、私有財産、国家および法」の一部分が公表された。<sup>(14)</sup>そのJ・P・マイアーは、さらにこの年、同じ「新約聖書」の「C道徳、交通、利用説」の中から「利用説」の主要な部分を、八月二十九日付「Vorwärts」の Spätausgabe に公表した、といわれる。そして翌三二年には、すでに公表された部分をも含めて、「シュティルナー」稿の全体が一挙に公表されるはずである。

註(一) Ed. Bernstein (herausg.), Der „heilige Max“,

Aus einem nachgelassenen Werk von Marx-

Engels über Max Stirner, *Dokumente des Sozialismus*, Bd. III ~ Bd. IV, 1903 ~ 1904. <sup>(11)</sup> *ibid.*, <sup>(12)</sup> *ibid.*

『ドイツ・イデオロギー』公刊史に關する覚書(重田)

ストにした邦訳は改造社版『マルクス・エンゲルス全集』第七卷の二に収録されている。

(2) 冒頭におかれた「緒言」で、ベルンシュタインは次のようにいつている。「F・エンゲルスが遺言でA・ベーベルとこの雑誌の編輯者との配慮にゆだねた草稿の中に、シュティルナーをめぐる、またかれに反対した労作が見出される。この草稿と並んで、エンゲルスによる目録があるが、その上にはハモールとわたくしVという言葉がカッコに入れて記入されている。それから明らかかなように、ここで大事なことは、それがマルクス、ハモールVとエンゲルスとの共同労作だということである。草稿そのものは大部分がエンゲルスの筆になり、はじめの一六ページと、それにその後にくる数ページだけがM・ヘスによつて書かれてゐる。マルクスの筆蹟としては、本文と草稿の欄外にあるごく僅かの訂正にそれがみられるだけである」(Ebenda, Bd. III, S. 17.)

(3) Vgl. Ebenda, Bd. III, Heft I S. 17 ~ 32, Heft 2 S. 65 ~ 78, Heft 3 S. 115 ~ 130, Heft 4 S. 169 ~ 177,

『フライン・イデオロギー』公刊史に関する覚書(重田)

Heft 7 S. 306~316, Heft 8 S. 355~364, Bd. IV, Heft 5 S. 210~217, Heft 6 S. 259~270, Heft 7 S. 312~321, Heft 8 S. 363~373, Heft 9 S. 416~419. なお、その中の第 1 冊の Bd. III の 217 頁 Heft 1 S. 17~19, Heft 2 S. 65~68, Heft 4 S. 169~170, Heft 7 S. 306 の \* 第 4 Bd. IV の 217 頁 Heft 5 S. 210, Heft 6 S. 259 の 1 冊の 217 頁は全部が「マンマン・ライオン」による Vorwort の 217 頁 Vorwort である。大月書店版『マルクス・エンゲルス選集』第一八巻の「著作年表」五二ページによるところ、「シュタイナー」稿は「B. III (1903), IV (1904), V (1905)」の部分に「公表された」と記載されているが、第五巻ではまったく収録されていない。誤記もしくは誤植である。

(4) 「田舎郎書」の 217 頁の 217 頁「Dokumente Bd. III S. 174, 175, 308, 313, 364」の五箇所に「……」がしるは、……による欠落箇所の指示がみえる。「新約聖書」の 260, 261, 262, 263, 264, 265, 266, 267, 268, 269,

## 九〇

270, 312, 313, 314, 315, 318, 319, 320, 363, 364, 373, 416, 418 による多くの箇所に欠落が存在し、しかもこれらは同一ページで数箇所が欠落を示しているという状態である。

(5) D. Rjazanov, Einführung des Herausgebers zu: Marx und Engels über Feuerbach, *Marx-Engels Archiv*, Bd. 1, S. 207. 三木訳「一ページ」。

(6) 本稿 第二節七九ページ参照。

(7) 本稿 第二節八一―八五ページ参照。

(8) 本稿 第四節(本誌十二巻一号掲載予定)参照。

(9) Vgl. Rjazanov, a. a. O., S. 207. 三木訳「一ページ」。なお同様の指摘が G. マイヤーの『エンゲルス伝』第一巻の巻末「典故と報告」の四〇三ページにもみえる。

(10) Vgl. K. Marx, *Der historische Materialismus, Die Frühschriften*, herausg. von S. Landshut und J. P. Mayer, Berlin 1932, S. 440 Anmerkung.

(11) その理由として「マルクスのシュタイナーは次のように述べている。『それ(—「A・共産主義」—重田)に

づく章「人道的自由主義」では、三フォリオ・ページにわたる最初のところだけが現存している。第一部の現存の草稿は四〇ページで終っている。第二部は四三ページから始まっているのだから、二つ折り版に書かれた草稿の二ページつまり八ページが欠けている。この点を確認することによつて、われわれはなお、この章の最初の三ページがここに公表される必要があるほどに重要とおもわれぬ旨認めたい」(*Dokumente*, Bd. IV, S. 210)。

- (12) Vgl. S. Landshut und J. P. Mayer (herausg.), a. a. O., S. 220 Anmerkung.  
 (13) Vgl. Ebenda, S. 362 Anmerkung.  
 (14) Vgl. Ebenda, S. 429 Anmerkung.